

2012年4月21日

第9回 日中戦争史研究会

参加者（五十音潤，敬称略）

王敬翔（愛知大学中国研究科），大野絢也（愛知学院大学），菊池一隆（愛知学院大学文学部），斎藤晃一郎（愛知大学大学院），柴田哲雄（愛知学院大学），武井義和（愛知大学），張鴻鵬（名城大学法学研究科），野口武（愛知大学大学院），馬場毅（愛知大学），姫田光義（中央大学名誉教授），古橋ふみ子（愛知大学），本多正廣（愛知大学大学院），増田喜代三（愛知大学大学院），丸田孝志（広島大学総合科学部），水野光明（都留文科大学文学部），森久男（愛知大学），山口哲由（愛知大学 ICCS），山本早苗（愛知大学），楊韜（名古屋大学），

報告1：武井義和（愛知大学）

「日中戦争期上海の朝鮮人社会について」

【報告要旨】

近年、日中戦争期の上海における朝鮮人コミュニティに関するいくつかの研究報告がおこなわれていますが、本報告では上海における朝鮮人コミュニティが親日化したプロセス、およびそういった変容が日中戦争が激化していくなかでの日本への編入政策とどのような関わりにあったのかに関する発表がおこなわれました。

【質疑応答】（司会：馬場毅）

馬場：武井氏はこれまで上海における朝鮮人社会の研究をおこなわれ、博士課程では、日本国籍から離脱して中国籍を取ろうとした朝鮮人を対象に論文を執筆された。本日の発表では、1932年をもって上海の朝鮮人社会が親日的になったという考えに対する疑義を呈するとともに、1940年以降の状況を含めて上海における朝鮮人の状況を考察していく必要性を述べられた。

丸田：本発表では「親日社会」という語が非常に重要であるが、どういった定義で述べられているのか？朝鮮人親友会の組織や目的についても独立運動家へ言説をもって判断するのは根拠が弱いのではないだろうか、やはり活動の実態を裏付ける資料が欲しい。1920～1930年代半ばまでの上海における朝鮮人移住者がどういった職業に就いていたのか、その生活や生業の実態がもう少し描写できれば当時の上海の朝鮮人社会がより明確になるのではないだろうか？また、上海におけるテロ後の人口の動態を重視されていたが、むしろ29年から30年への変化の方が大きかったのではないだろうか？1938年にすでに戦時動員の影響下にあった朝鮮人の活動を指して、「親日的」と判断するのは難しい部分が多いのでは

ないだろうか？

武井：先行研究は「親日社会」をどのように定義してきたのかに関して、全体的に日本人との係わりの増加をもって親日的と考える傾向がみられた。これは民族独立運動と対比されたものと考えられる。1920～1930年代の上海の朝鮮人社会の特徴としては無職者が多い。基礎となる統計資料に問題点も多いが、有職者として鉄道職員、商店主、運転手などであり、日中戦争期の朝鮮人の職業とはかなり異なっていたようだ。

森：モルヒネの売人が多かったとされるが？

武井：多かったとされるが、日本側は不正業者として記録しており、把握は難しい。1920～1930年代にかけての急激な人口増加の理由は分からない。世界大恐慌の時期と一致するので東北や華北から流入して人口が増えたのではないかと考えられる。戦時動員された人びとを指して親日活动と表現したのは先行研究に基づいているが、私自身も括弧付きで表記しており検討が必要な課題と考えている。朝鮮人親友会の組織や目的を理解するうえで資料をどのように利用していくのかに関して、私は柳寅発の発言に基づいているが、それは彼の独立運動家としての経歴や発言がなされた経緯も含めて判断したものであり、朝鮮人親友会の実情をある程度反映したものであると考えている。

水野：質問は3つある、第一に大韓民国臨時政府と上海朝鮮人親友会との関わりに関して、日中戦争下で臨時政府も奥地に移転していくが、その移転時における臨時政府と親友会との関係がどのように保たれていたかを知りたい。移動のなかでは両者の関係は難しくなると思うが。第二に、今日の発表では触れられなかったが、当時の親友会と中国共産党や国民党との関わりを考えていく必要があるのではないかと？第三に、朝鮮人児童の教育に関して、独立運動家の育成が目的なのか？帝国臣民の育成なのか？その初期の目的が重要だったのではないだろうか？また、教育を説明する資料のなかに国語講習とあるが、これは何語だったのだろうか？

武井：まず、国語講習の国語は日本語である。児童教育の詳細なカリキュラムに関する資料は出てきていない。仁成学校の問題点として、独立運動に関連する教育をおこなう一方で、一般知識の教育に乏しいという反省点が挙げられていたので、一般知識の教育を主目的としていたのではないかと推察できる。臨時政府と上海居留朝鮮人との関わりは、資料上からの組織としての交流は見いだせていない。また、朝鮮人会は日本政府と深く関わるようになっていたので、中国の抗日組織や国民党ともほとんど関係はなかったと考えられる。

菊池：1920～1930年にかけて間島周辺に集まっていた朝鮮人が、一方でウラジオストックに行き、残りが上海に行ったが、第二次上海事変までの上海は独立運動家の拠点でもあったと考えられるのではないだろうか？また、独立運動家のなかにも民族主義的な活動や共産主義的な活動があり、国民政府の移転は1937年以降なので、両者の動きを踏まえて上海朝鮮人会の活動や性格を考察していくべきではないだろうか？また、上海における朝鮮人人口の増加をもって混在状況が増したと表現しているが、必ずしもそうとは言えないのではないだろうか？また、上海はCC団の活動拠点でもあり、彼らは朝鮮人や台湾人の独立運動家とも密接に関わっていたとされており、彼らの活動も考慮して論じるべきだろう。

姫田：20世紀前半の朝鮮人の運命を考えるべきであろう。1930年代に極東シベリアの朝鮮人はアラル海に付近に連行され、強制労働に従事させられる。残った朝鮮人も国家間の状況のなかで様々な立場を取らざるを得ない人びとが生じてきた訳であり、そういった大きな状況を踏まえて考察していく必要がある。質問としては、朝鮮人のなかにも戦後に戦犯として処罰された人が居たと考えられるが、そこら辺に関して伺いたい。

武井：私の今日の発表はかなり制限した状況のなかで私が抱えてきた課題「上海における日本人と朝鮮人の混住と朝鮮人社会の親日化」という事象に関して話してきた。しかし、上海だけを取り上げて周辺状況との関わりの考察が十分ではなく、中国共産党や国民党、大韓民国臨時政府との関わりも含めて考え直す必要性を感じた。また、20世紀の朝鮮人は流浪の民である側面が大きく、朝鮮ディアスポラという表現もされる。そういう大きな政治状況のなかで祖国から出ざるに得なかった人びとの状況を考えるべきという点は同感である。戦犯として裁かれた上海の朝鮮人に関しては分からない。ただ、朝鮮人には日本と密接な関わりを持った民間人も多く、彼らのなかで戦犯として財産没収になったという人の記録は確認できる。

姫田：B、C級戦犯として南京や上海から巣鴨に移送されて処刑された人数も多いので、そのなかにかかなりの朝鮮人が含まれていたのではないかと思うが、詳細は分からない。

大野：朝鮮人社会との臨時政府との関わりはやはりあったと思うが、どういった形で上海朝鮮人会と臨時政府と係わりがなくなっていたのかをお教え頂きたい。

武井：1920年代は臨時政府から教民団という組織的な繋がりがあったことは明らかだが、臨時政府が奥地に移転していった理由には、テロリストとしての認識が広まり、フランス租界も日本政府に協力して取り締まりを強めていったためである。その結果、全ての臨時政府関係者がいなくなったわけではなかったが、主要な人びとの多くは上海を出たため、関係性が薄れていったと考えられる。

馬場：親日活動，親日社会という表現は，独立運動家が使った言葉をそのまま使っている印象が強い。日中戦争期の朝鮮人は非常に曖昧な立場であった訳であり，中国側が，日本人と朝鮮人を分けて考えていたのか否か，また，朝鮮人からの中国人に対する考えなどを推察できる資料がないだろうか？上海事変以降，上海租界に住む日本人は中国から敵視されており，そこに住む朝鮮人の人びとは日本との関係性を深める以外に選択肢がなかったとも考えられる。そういった状況も鑑みると，これを「親日的」と表現すべきか否か難しい

武井：人びとの内面的な心理をおもんばかる資料はほとんどない。中国の文献では，第二次大戦直後，中国人の朝鮮人に対する報復活動が活発化したとされる。こういう実態を踏まえると，朝鮮人と日本人を同一視していたという部分が大きかったと考えられる。朝鮮人が中国人をどのように見ていたのかに関してよく分からない。揚樹浦に居住していた居留民団の人からの聞き取りでは，中国人に対して傍若無人に振る舞い人びともあったとされる。

本田：現在の中国社会でも朝鮮人に対する良くない印象を持つ者も多いが，そういう傾向は歴史的な沿革が影響していると言えるか？

武井：そういった影響はないわけではないだろう。北京では，戦時中に日本人とともに行動した朝鮮人の印象が強い場合もあったとされる。

柴田：資料面で，上海档案馆などに関連資料はなかったか？またレジュメには，現地における朝鮮語の新聞とあるが，これは上海で刊行されていた『東亜日報』を指すのか？他に上海で刊行されていた新聞や雑誌はなかったのか？

武井：上海档案馆には戦争中の資料が多く，断片的にモルヒネの取引に関する資料もみられたが非常に少ない。新聞は朝鮮語の『東亜日報』である。新聞・雑誌に関しては，当時，『光化』という雑誌があったはずであるが，この原本は未だに見つけれられていない。この雑誌は創刊当初は朝鮮語で刊行されていたが，後に日本語による表記に変わった。

報告 2：姫田光義（中央大学名誉教授）

「日中戦争のもう一つの戦後；撫順・太原の戦犯たちの生き様を思う」

【報告要旨】

日中戦争後、ソビエトから引き渡された日本人戦犯が収容された遼寧省撫順市の戦犯収

容所においてどのような処遇がおこなわれたのかに関して、文献や聞き取り調査に基づく実態が報告されるとともに、冷戦下における中国共産党の捕虜政策の意義、戦犯の帰国後の言動から得られる教訓等に関する提言がおこなわれました。

【質疑応答】（司会：馬場毅）

馬場：様々な話題に関して触れられたが、主要な話題としては撫順の戦争犯罪人に関する報告であった。この話題では、軍国主義者であった戦犯たちが自らの置かれた境遇のなかで気持ちを変化させていく状況を説明され、さらにここから読み取れる現代の日本社会に対する教訓を述べられたと思う。

柴田：中国の人権問題を支援しているのが日本の右翼の立場の人びとであり、逆に日本の過去の人権問題などを探るうえで協力しているのは中国共産党である。こういった側面に中国と日本のねじれた関係を垣間みることができると思うがいかがだろうか。

姫田：そういった意見に関しては賛成する部分が多い。日本の右翼は分裂を意識して中国の少数民族問題を利用する傾向がある。私は最近、日中友好を掲げて活動しているが、それでも民族関係に関しては触れることはできない。民主化問題に関しては、中国人であっても比較的発言できる機会が増えているように思われるが、それでも民族問題に触れることははばかれる。そこには中国の大国主義があると考えられる。1989年の民主化運動の際には民族独立に関して言及した学生も多かったとされる。民主主義と民族独立の問題は極めて近い関係にあり、双方を解決していく必要がある。

森：私はあるテレビ番組においてシベリアから撫順に移送されてきた戦犯と看守とのかかわりを描いた際に、戦犯と看守の関係を克明に調べた。そこでは、看守の感情としては戦犯に対するいたわりの気持ちはなかったものの、周恩来からの「戦犯を優遇すべし」という命令に従い、意に反する形で戦犯と接していたようだった。それゆえに、この状況を指して人道主義と表現するのは問題があるように思える。また、登戸研究所に関して、当事者による回顧録が出版されている。

姫田：偽札作りも含めて登戸研究所の回顧録は少なくない。第一の指摘に関しては、肯定する部分も多い。ただ、日本の戦犯たちはシベリアでの過酷な生活を経て、さらに中国に移送されてきた人びとであり、撫順では食事などの側面で比較的良い待遇を受けた。日本人が収容所において中国に対しての考え方を変えるきっかけとなったできごとが2つあり、1つは自殺しようとした日本人戦犯を看守が必死で救助したこと、もう1つは宮崎大尉が三光作戦の様子を初めて告白したことがあったとされる。確かに政策的な影響もあったと考

えられるが、看守と戦犯との長い付き合いのなかで日本人の気持ちが変わり、さらに中国人の気持ちが変わっていったことは事実があり、それは奇跡と呼んでも良いのではないかと考えている。私自身はこういったもの心の変化から学びたい。

森：中国政府は、まず看守を思想改造して、さらにそこから戦犯にも影響を与えるように考えたとも言える。こういった捕虜の処遇に関する命令を発したのは周恩来であるが、その影から毛沢東が戦犯の扱いに関する指示をおこなっていたと考えられる。

菊池：撫順の事件から話を進めると難しくなる。1937年の捕虜優遇条例などから捕虜をめぐる政策は始まっている。当時、捕虜になった日本兵の処遇は非常に悲惨なものであったが、その状況に対して長谷川テルなどが捕虜の人権問題を訴えて捕虜優遇条例を作るのに尽力し、それを中国共産党も受け継いでいった歴史があるのではないだろうか。こういった政策を主として進めていったのは周恩来と朱徳であったと考えている。

姫田：中国共産党の捕虜政策を誰が主導して進めていったのかは明らかにできない部分がある。私が問いたいのは、政策の意図とは別に遺骨の移送や捕虜への待遇に当たった中国人の態度に関してである。

森：張家口が人民解放軍によって解放された際の記録を呼んだことがあるが、そこでは捕虜の中でも階級が低い者は処刑される傾向にあったが、階級の高い者は却って処刑を免れた例もみられたとされる。

姫田：共産党を一方向的に賞賛する意図はない。通化事件では人民解放軍が数百人単位で殺害した記録がある。1930年代のトロツキスト追放運動の際には、中国人が多くの人を殺害する事件も起きた。ただし捕虜政策に関しては別の視点から考える必要がある。太原でも同様に捕虜収容所があったとされるが、この状況に関しては十分に把握していない。ただ、太原に収容された捕虜・戦犯たちも日本に戻ってからは撫順から戻った人びとと共に日中友好に関する活動に従事したことは事実である。

森：恐らく、太原でも撫順と同様の捕虜政策がおこなわれたのではないかと考えられる。そう考えると中国共産党の対戦犯政策の問題であって、人道主義などの問題ではないとも考えられるが如何だろうか？

姫田：私は日中回復以降、日中友好問題を扱い、そのために活動してきた部分が多い。そのために細部の検証に関しては不十分な部分があることは認識している。当時の中国における命令系統として毛沢東を頂点としていたことは明らかであるが、捕虜政策などの細

部の意志決定がどのようになされていたのかは明らかではない。ただし、撫順の捕虜収容所において戦犯と看守の気持ちが変わっていったのは事実であるし、国際社会のなかで日本の立場を考えれば、日中間に横たわる問題も解決する必要があることもまた事実である。だからこそ中国人にも日本人にも撫順の教訓から学んで欲しいと思っている。

馬場：最近の中国共産党政策の研究によれば、中国が冷戦構造において孤立するなかで、帰国後の戦犯たちの影響力を期待して捕虜政策をおこない、なんらかの見返りを期待していたという部分も指摘されている。看守たちが戦犯に反感を持っていったというのも当然だと思う。ただ、そうであったとしても、撫順における中国人の日本人に対する態度はそんな政策だけで理解できない部分があると思う。私の疑問としては、撫順における民主化運動とシベリアにおける捕虜たちの民主化運動とはどのような違いがあったのだろうか？

姫田：シベリアと撫順ではまったく環境や待遇が異なっていた。撫順では自ら学ぶ機会があったのに対して、シベリアでは強制的に運動に携わることになったとのことであった。そのために反対も大きく運動も根付かなかつたと考えられる。

森：中国共産党の支配地域から引き揚げてきた人びとの記録にも、シベリアから引き上げてきた人びとも民主化運動の記述があるが、両者は実は同様の状況にあったと考えられるのではないだろうか？

姫田：そこはまったく違う、シベリアにおける強制労働などにも教育があった。中国における収容所ではそうではなかったと考えられる。

張：5つの質問がある。第一に、中帰連の友好活動をどのように評価するかに関してである。「彼らは洗脳された人びと」と評価されていたが、どのように思うか？第二に、撫順の監獄では戦犯たちは共産主義の本なども読まされたとされるが、シベリアに抑留された捕虜たちも同様にそういった本を読まされたとある。そこにはどのように違いがあるのか？第三に、関東軍は満州の地下要塞建設において多くの労働者を連行し、強制労働に従事させたうえで虐殺したとされるが、それをどう思われるか？第四に日中戦争終戦後の旧満州国において、ソ連軍の侵攻に対する防衛のために日本軍現地指令が停戦命令を隠匿し、その結果に生じた戦闘で民間人も含めて多くの死傷者を出したがその点をどう思われるのか？、第五に、撫順において生じた出来事に関して政策的な意図も大いに影響したと思うが、私は特に人間性の復帰という部分が重要だと思うが如何だろうか？

姫田：第一に関して、私は日中国交正常化前から友好活動に尽力していた点を評価したい、また、日中戦争当時に日本軍が何をおこなったのかという点を初めに示したのも彼らであ

る。第二に関して、撫順では教育において比較的多くの選択肢のなかから選択の余地があったとされる。第三に、指摘されるように非常に重要であり、第四に関しても同様である。第五に関しては、これまでの議論のように見解が分かれる部分であるが、私は「仁愛」という言葉で表現したい。

[文責 山口哲由]